

## 書評リプライ---メッセージは届いたか

金子 勇

1 まさに渾身の書評論文である。新しい職場に赴任された直後に、短期間でここまで本書を精読し、重要な論点を提出していただいた片桐資津子氏に心から感謝申し上げたい。

この『社会学的創造力』（以下『創造力』）は、ミルズの『社会学的想像力』（以下『想像力』）の新装版が1995年に刊行されたことをキッカケにして書き進めたものである。それまで1965年の初版を何回か読んでいたが、14歳年下のミルズによるパーソンズ『社会システム』への過激なまでの批判（『想像力』の第二章）がずっと印象に残っていた。しかしほぼ10年ぶりに読み直したら、私自身の加齢効果のためか「かれ自身の明確な方法論の代案を提供できなかった」（訳者解説）ことが大いに気がかりとなった。そこで、個別論文を執筆する傍ら、あいまいな部分が多かった自分の実証志向の社会学方法論を、「想像力」を駆使し複数の素材を融合させることで得られる「社会学的創造力」の角度から再点検し始めて5年が経過し、このたびの出版に踏み切った。

2 この期間に座右の銘にしていたのは、「情熱がときに反省よりも思いきったことをさせるのは、情熱の方がより多くの実行力を与えるからである」（ヴォーヴナルグ、1955）という文章である。これを私は「反省的社会学」の批判にも転用しているが、反省よりも情熱こそが著書執筆には重要であることを本書でも示そうと努めた。未熟ながらもその方針で『創造力』を書き上げようと苦労していた日々の留意点は三つある。

一つは高田保馬（1883-1972）、鈴木栄太郎（1894-1962）、清水幾太郎（1907-1988）、内藤莞爾（1916-）、鈴木広（1931-）という私にとっての社会学先行5世代の著作群を学び、その魅力を片桐氏らの若い世代に伝えることであった。二つは「都市化の音楽社会学」のように、20年間以上かけてでもどうしても書きたい論文があり、少しずつ資料を収集して分析し、それをまとめて公表したいという希望があった。三つは固定観念・固定パラダイムからいかに自由になるかを実践することであった。この三点が成功したかどうかは読者の判断に待つより他はないが、社会学への「門へ誘うよりも、折角の門に入る気持ちを阻喪させ断念させるのに貢献する」（丸山、1998）ことがないように願っている。

3 さて、今回頂戴した片桐氏のコメントの大半は正鵠を得ていて、執筆過程で自ら感じていた本書の弱点をあぶり出している。「卵」を「金の卵」に成長させる条件も「想像力」強化の訓練方法も、言語化することは極めつけの難問（Gordian knot）である。その意味で、本書の限界ははっきりしているので、あとは氏の世代が25年間の総決算から紡ぎだされた私からの「メッセージを受け継ぎ」、21世紀初頭に新しい境地を開拓してほしい。その応援のつもりで、いくつかの議論の素材を提出することにしたい。

まずファンジェの転用による「社会学的創造力」定義の不鮮明さについてはご指摘の通りだが、ただこれは当初から意図した方針であった。なぜなら、あいまいでかなり一般的なままの定義のほうが、実際のアウトプットで「創造力」を発揮できるという経験をもっていたからである。本書における「創造力」の事例として氏が読み取られた集合論のベン図を活用した都市的生活様式論におけるコミュニティパラダイム論の再構成にしても、環境論で多用されてきたフリーライダー論の少子化現象への適用にしても、「社会学的創造力」の定義があいまいだったことと無関係ではない。「社会的」にこだわる限り、コミュニティパラダイム論へのベン図応用という発想は全く浮かばないであろう。創造的研究においては、「既知の事実を既知の観点に関係づけながら、それでいてある新しいものを創り出す」（傍点原文、ウェーバー、1998）ことが何よりも重要であると考えた。実証研究の過程にインプットする素材を「社会的」情報群のみに局限せずに、アウトプットとして「社会学的創造力」が得られればよいという立場を私は採用してきた。それは「都市化の音楽社会学」に象徴的である。

28歳の頃にウェーバーの「音楽社会学」の骨子だけを学び、あとは20年かけて歌謡曲の原資料に取り組んだ。すなわち研究にインプットする素材の「社会学性」に拘るよりは、研究成果としてのアウトプットのもつ「社会学性」を優先したことからのみ、この論文は完成した。この論文作成過程から、融通無碍な思考の跳躍力をどうやって身につけるかのヒントを得ていただければ幸いである。

4 氏が提示された二つ目の疑問点である「想像力」と「創造力」との関係については、少なくとも研究の開始段階では「想像力」が「創造力」に先行すると断言できる。「既知の事実を既知の観点に関係づけながら」、新しいものを生み出さない論文はあまりにも多い。それは関係づける際の「想像力」の欠如に原因がある。氏が希望をこめられる「互いに豊かに太りながら止揚していく」「車の両輪」関係に至るのは、研究の第二段階以降である。

であれば、研究の開始時点での「想像力」をいかに獲得するか。ここに氏の切なる問いかけが集約されている。私の回答は「都市化の音楽社会学」で分析した「あなたを待てば 雨が降る 濡れて来ぬかと 気にかかる」（1957年 佐伯孝夫作詞・吉田正作曲『有楽町で逢いましょう』）に隠されている。すなわち誰にも話さない「気にかかる」テーマを持ち続けることであり、これにはかなり根気が要る。「気にかかる」テーマを何年かけても最後まで追求しようとするライフスタイルが、「想像力」と「創造力」の源泉である。研究にとってもっとも重要なことは、個別的な能力ではなく日常的な姿勢である。それは先人の業績の学習もしくは模倣から始まる。誤解がないように付加したいのだが、本書では「誰を研究するか」を全面否定しているのではない。ただそのレベルに止まらず、「何を研究するか」まで進めないと、社会学の本格物が書けないと強調しているのである。

5 氏のコメントの特徴は、自らの疑問点に対しての解答までを併せて提示されるところにある。そのうち「想像力」を後天的に身に付ける条件として、研究者が「異化」される必要性が挙げられている。この「異化」のもつ重要性は経験的にも理論的にもよく理解できるが、どのレベルの「異化」が有効なのかについての議論がただちに必要になるであろう。「異化」のレベルを確定しないと、せっかくの優れた指摘が生きてこない。参考文献か、研究方法論か、調査経験か、分析する素材か、情報提供者か、研究指導者かなどの相違によって、「異化」は幾通りにも成り立つであろうから。

私の例でいえば、「都市化の音楽社会学」に従事していた際に社会学を「異化」していたものは歌謡曲であり、音楽記号であった。また「子育て共同参画社会」論を書いていたときに「異化」させてくれたのは、フェミニズム系の膨大な著書や鳴り物入りの男女共同参画社会法案およびその解説紹介者であった。「専門機関サービス」を軸とする「都市的生活様式論」の再構成に取り組んだキッカケは、幕張にある市町村アカデミーでの職員研修会における質問であった。15年前の「そのような内容は常識だ」という受講生からの素直な疑問が「異化」作用を促進して、集合論のベン図の活用に至った。

6 このように重要な「異化」の機会を自力で増大させる方法はあるのか。私の経験からそれは三つに大別できる。一つはテーマが同じでも、社会学以外の経営学や社会心理学や政治学そして文芸作品などの視点が異なる分野に参入することである。たとえば、官僚制の問題ならば松本清張の作品、日本人論ならば司馬遼太郎の大河小説、組織と個人ならば西村寿行のバイオレンス・ロマンなどによって、私は好んで「異化」されてきたようである。

第二に「異化」の機会を増やししながら、自らは数本の「大いなる助走」を持ちつづけることが想像力と創造力の土台になる。本書でいえば、①第I部「現代社会学の理論と方法」は5年間の短期助走目標に位置づけられ、中期助走目標は②「都市の少子高齢化研究」になり、そして20年にわたる長期助走目標が③「都市化の音楽社会学」であった。「跳躍台なきわれらが永遠の助走、呼び出されることなきこの大いなる待機」（筒井、1982）のままでは「金の卵」は孵化しない。ともかくも跳躍して、研究成果を公表することがさらなる「異化」を保証する。

三つ目の「異化」の機会は失敗から学ぶこと（failure study）である。私の場合、34歳までの基礎統計学の知識不足は甚だしく、それによる失敗が北大赴任を「異化」のキッカケとしてくれた。専門

家とは聞こえがいいが、それは自分の能力に枠をはめた状態なので、その枠を取り外さないと、長期的に見て現役生活が維持できない。固定観念、固定パラダイムへの依拠は楽であるが、創造性の敵でもある。教条主義からは何の創造性も生まれないことはマルクス経済学史が教える通りである。

7 私の社会学パラダイムは「欠損家族」論批判や「フリーライダー」批判からも分かるように「平等」志向にあり、この内容とメッセージを一番伝えたかったのは片桐氏ら30歳前後の研究者への離陸世代であった。片桐氏は今後「自由論」の立場で「少子化のミクロ社会学研究」に取り組みされると決意表明された。修士論文が1400枚の氏ならではの力作を鶴首して待ちたいが、私が造語した「子育て共同参画社会論」の処方箋は「経済学的」ではなく、人種、年齢、ジェンダー、階層間の「平等」を問いかける「社会的処方箋」そのものであることに留意してほしい。これらの発想はマクロ社会学に基盤を置き、併せて造語した「子育てフリーライダー」の抽出もライフスタイル論の文脈にあるのだから。いやむしろそれらを超えて、99年度の「少子化対策臨時特例交付金」の2000億円が保育園と幼稚園の修理費に化けてしまった現状から、マクロ社会レベルで想像力が絶無の場合の恐ろしさを認識されることが先決である。

松田（1990）のネーミングを借用すれば、「集中力」に富み、「類比力」が豊かで、「想像力」に溢れた「創造性」のある研究は、氏を含む「若い世代にしか期待できない」ので、少子化研究も含めてぜひ本書を「草分け」として「発展させて」「学問貢献」をされることを熱望している。

#### 【参考文献】

丸山真男，1998，『講義録・政治学1960』東京大学出版会。

松田道雄，1990，『私は女性にしか期待しない』岩波書店。

筒井康隆，1982，『大いなる助走』文藝春秋社。

ヴォーヴナルグ・関根秀雄訳，1955，『不遇なる一天才の手記』岩波書店。

ウェーバー・折原浩補訳，1998，『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店。

（かねこ いさむ、北海道大学大学院文学研究科 高齢社会学・社会変動論）

（isamu@let.hokudai.ac.jp）